

〈研究ノート〉

# 『遠野物語』の成立とその百年

橋 内 武

キーワード：遠野，柳田國男，佐々木喜善，水野葉舟，口承文芸

## 0. はじめに

柳田國男の『遠野物語』（初版）が刊行されて、2010年（平成22年）で百年になる。記念すべき年に改めて『遠野物語』を読み直し、①その成立事情と題材を確認し、②この作品に対する識者の評言を振り返り、③『遠野物語』による遠野の地域振興について述べておきたい<sup>1)</sup>。

## 1. 『遠野物語』の献辞と序文

『遠野物語』の献辞の文言はやや異例である。「此書を外国に在る人々に呈す」（『柳田國男全集』，第2巻，p.7）とあるからである。

では、なぜこのような献辞を書いたのか。柳田國男は『遠野物語』（増補版）の覚書の中で、「其頃友人の西洋に行って居る者、又是から出かけよう

---

1) 本稿は去る2010年10月31日に岡山市の稲田和子宅で行われた昔話研究会10月例会で報告した『『遠野物語』の成立―百周年を記念して』のレジメをもとに大幅に加筆したものである。これに先立ち、8月31日から9月6日まで岩手大学シニアカレッジ（遠野物語ゼミナールを含む）へ参加したが、この研究ノート執筆の動機付けとなった。

として居る者が妙に多かったので、其人たちに送らうと思って、あのような扉の文字を掲げた。」と書いている。そのような事情を知らない読者は、日本民族のエトスを「外国に在る人々に」語る企てと映るかもしれない。百年を経たいま、現代の読者は「外国に在る人々」と同じように、本書刊行の時期から遥か離れた世界にいることを実感するだろう。

### ＜序文第1節＞

此書はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月より始めて夜分折々訪ね来たり此話をさらしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実な人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり。思ふに遠野郷に此類の物語猶数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山神山人<sup>2)</sup>の伝説あるべし。願はくは之を語りて平地人<sup>3)</sup>を戦慄せしめよ。此書の如きは陳勝呉広のみ。(以下省略)

(『柳田国男全集』第2巻, p.9)

## 2. 『遠野物語』の成立

以上のような序文で始まる『遠野物語』はどのようないきさつから成立したのであろうか。それには、柳田國男だけでなく、佐々木喜善(「鏡石」と水野葉舟といった同時代の人物が関与していたのである。(石井 2000, 遠野市立博物館 1992などを参照。)

さて、著者・柳田国男は、1875年(明治8年)生まれで、1962年(昭和37年)88歳で没す。「日本民俗学の父」とされる。

1908年(明治41年)11月4日から翌年5月上旬まで数回、東京の牛込区加

2) 山神山人 山人は山村で暮らす人々のこと。柳田國男の『山の人生』を参照。

3) 平地人 山人と対立する。多分東京人・都会人を意識しているのではないか。

賀町の柳田邸で佐々木喜善（23歳）が語った遠野地方の神話・伝説・世間話などを柳田國男（34歳）が筆録し、それを文語調の名文で一編の書に仕上げたのが、『遠野物語』である。全119話から成る。初版は1910年（明治43年）6月14日の発行、著者兼発行者は柳田國男、印刷者は今井甚太郎、印刷所は杏林舎、売捌所は聚精堂であり、350部発行された。実価50銭。一冊ごとに番号が振られていた。第1号である「初穂」は佐々木喜善へ、しかしそれ以外に遠野の人々へは一部も贈呈されなかった。第2号は柳田自身が「自用」に保管した。

『遠野物語』の成立過程は、石井（2000, 2010）によると、つぎの通りである。

①聞き書き（1908年、明治41年11月～翌年5月初め）→②草稿本→③原稿用紙の裏書き→④清書本→⑤初稿本と散逸した再校→初版本の発行（1910年、明治43年）→再版の放置→「遠野物語拾遺」を追捕して増補版の刊行（1935年、昭和10年）。

なお、語り部の佐々木喜善を柳田國男に紹介したのは、東京の同じ下宿にいた水野葉舟である。柳田國男の還暦を記念して、1935年（昭和10年）7月に「遠野物語拾遺」を含む『遠野物語 増補版』が郷土研究社から刊行されたが、佐々木喜善はすでに鬼籍に入っていた。

### 3. 佐々木喜善という人

語り手・佐々木喜善は、1886年（明治19年）生まれで、1933年（昭和8年）に48歳で没す。（遠野市立博物館 2004などを参照。）

土淵村山口の佐々木萬蔵の養孫（厚楽家に生まれたが、父死亡のため母の実家である佐々木家に預けられる）。土淵小学校とその補修科、遠野高等尋常小学校高等科を卒業、盛岡の岩手医学校（現岩手医科大学）に入学したが、1年で中退し、東京の哲学館（現東洋大学）教育学部に入学するも、井上円了（妖怪学）に馴染めず、早稲田大学文学部に転学した。土淵村長などの公

職をつとめが、事情により仙台に移り住み、そこで亡くなった。

佐々木喜善が水野葉舟に出会ったのは、1909年（明治39年）10月17日のことである。日記に「夜水野君を訪ふて十一時半まで話す。初体面なれど互に心打ち解けて話し、怪談始まる。」とある。たまたま同じ下宿に、新進作家として活躍を始めていた水野がいたのである。

『遠野物語』前文に「遠野の人、佐々木鏡石君」とあるのは、佐々木喜善のこと。「鏡石」は泉鏡花にあやかって付けた筆名である。喜善は昔話研究の先駆者であり、「日本のグリム」として賞賛された（金田一京助）。喜善が収集・編集した書物には、つぎのものがある。

- ・『奥州のザシキワラシの話』（炉辺叢書）、東京・玄文社、1920年（大正9年）
  - ・『江刺郡昔話』（炉辺叢書）、東京・玄文社、1922年（大正11年）——日本において「昔話」を冠した昔話集として初めてのもの。
  - ・『柴波郡昔話』（しわぐん むかしばなし）東京・郷土研究社、1926年（大正15年）——小笠原謙吉の資料を書き直したもの。
  - ・『老嫗夜譚』（ろうおうやたん）、東京・郷土研究社、1927年（昭和2年）——石谷江（はねいしたにえ）からの聞き書き。
  - ・『聴耳草紙』、1931年（昭和6年）——佐々木喜善の収集した昔話の総集編であり、現在筑摩書房版（1964）が入手可能である。
- なお、遠野市立博物館は喜善生誕百年を記念して全集を編んだ。
- ・遠野市立博物館編『佐々木喜善全集』（全4巻）、遠野市立博物館、1986年～2003年（昭和61年～平成4年）

#### 4. 水野葉舟という人

仲介者・水野葉舟（1883～1947）は、東京生れの詩人・歌人・自然主義文学の小説家。享年65歳。

「近代日本の＜怪談＞の先駆者として再評価の高い作家水野葉舟は、柳田

國男に佐々木喜善を引き合わせ『遠野物語』の成立に大きな役割を果たしただけでなく、『遠野物語』が上梓される以前に、みずから佐々木喜善から直接聞き取っていた遠野の物語を發表していた。」——遠野にまつわる怪談・小説・随筆等31編を遅ればせながら初めて集大成したのが、横山茂雄編(2001)である。遠野の怪談は先に雑誌に載るが本にならず、『遠野物語』は自費出版で世に出た。前者は忘れ去られ、後者は「近代の名著」として残った。

## 5. 民俗学者・柳田國男の初期3部作

『遠野物語』は、柳田國男の初期3部作の一つであり、出版順では3番目に当たる。

### ① 『後狩詞記』

1909年(明治42年)3月15日に50部自費出版する。柳田による序文・宮崎県椎葉村の猪狩伝承を中瀬淳が記録した本文・椎葉村に伝わる古文書「狩之巻」という3部構成である。

### ② 『石神問答』

1910年(明治43年)5月20日に聚精堂から天金豪華本で1,500部印刷された。山中笑などとの間の石神に関する往復書簡を元に作り上げた本である。

### ③ 『遠野物語』

1910年(明治43年)6月14日に350部、番号入りで自費出版した。これは、前述のとおり、佐々木喜善から遠野の神話・伝説・世間話などを聞き書きして一編の書に仕上げたものである。柳田による序文・聞き書きした本文・古文書「獅子踊りの歌」(119話)という3部構成である。

内容と構成からして、『後狩詞記』と『遠野物語』は対をなす作品である。頭注には『石神問答』からの引用が散見される。これらの著作は互いに関連し合い、日本民俗学の誕生を記念するものとなったのである。

## 6. 『遠野物語』のジャンル

『遠野物語』はどのようなジャンルに属するであろうか。佐々木喜善が語った遠野の話について、水野葉水は怪談、佐々木喜善はお化け話であると認識していた。しかし、柳田國男はそれに『遠野物語』という題名を付けて刊行した。但し、Ronald A. Morse による英訳（1975）は *The Legends of Tono* である。つまり、訳者は「遠野の伝説」として世界に紹介したのである。

初版の119話の中には、実に多様な話が盛り込まれている。未だ口承文芸の諸ジャンルが明確に区別されていなかった時代の産物であると言えるだろう。今日私たちが行う通常の分類法に従えば、神話・昔話・伝説・世間話などを含み、それらが混然一体となって、一書をなしているのである。それぞれの代表話をいくつか挙げておこう。原著では漢数字で番号が打たれているが、ここではアラビア数字を用いて「1話」のように記す。

### ① 神話

1話は「遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿が石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落をなせしなりと」あり、湖水流失神話であることがわかる。

2話は「末の姫眼覚めて…最も美しき早池峰の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神各三つの山に住し、今も之「靈華」を領したまふゆえに、遠野の女どもはその妬みを恐れて今もこの山には遊ばずといへり。」——これが遠野三山神話である。

### ② 昔話

『遠野物語』に載った昔話の数は少ない。51話「オット鳥」、52話「ウマオイ鳥」、53話「カッコウとホトトギスの」3話は、動物物語の小鳥前生譚である。つまり、もともと人間であったものがある出来事によって小鳥になったのだと、その由来を語るものである。

むかし語り（または本格昔話）として筋がきちんと語られるのは、ヤマハ

ハ（山姥）の話である116話（逃竄譚）と第117話（瓜子姫）の2話のみである。

118話は紅皿欠皿（継子話）である。「継母に悪まれたれど神の恵ありて、つひに長者の妻となるといふ話なり」とあるが、モチーフの詳細は不明である。

### ③ 伝説と世間話

柳田は『遠野物語』の序文第3節中で「これはこれ目前の出来事なり」、「この書は現在の事実なり」と書いている。それゆえ、ノンフィクションの口承文芸であり、伝説と世間話の類が圧倒的な割合を占める。

69話はオシラサマの始まりに関する伝承である。「昔ある処に貧しき百姓あり。妻はなくして美しき娘あり」で始まる馬娘婚姻譚（異類婚）であるが、末尾には「馬をつり下げた桑の枝でその神の像を作る」とある。作られた3本の神像はそれぞれどこの集落のどの家にあるとまで明言するのだから、神話・昔話が伝説化したものと言えるだろう。

オシラサマ同様「家の神」として信じられていたのが、オクナイサマである（15話、73話）。子どもと遊ぶのを好んだのが、カクラサマである（73話）。

111話には「昔は六十を超えたる老人はすべて、この蓮台野へ追いやるの習ひありき」とある。姥棄ての伝説である。柳田國男は土地でいうデンデラノに蓮台野を当てた。

18話・19話・20話・21話の4話は孫左衛門伝説であり、旧家没落の伝承が語り継がれている。それらは、ザシキワラシとの遭遇譚、茸の毒に当たった話、蛇殺しの前兆、孫左衛門の稲荷信仰から成り立っている。――孫左衛門の屋敷跡には、井戸跡が残るのみである。

ザシキワラシ以外にもさまざまな妖怪や動物が登場するのが『遠野物語』である。55話から59話までの5話は河童の話である。例えば、55話は「松崎村の川端の家にて、二代まで続けて河童の子を孕みたる者あり。…その子は手に水掻あり。この娘の母もかつて河童の子を生みしことありという。」36

話は御犬の経立, 44話・45話・46話には猿の経立が現れる。御犬とは狼のこと, 経立(ふつたち)とは年老いて異様な姿になった妖怪のことである。男が狐に騙された話には, 60話, 90話, 94話, 第101話などがあり, 笑い話として聞いたのである。こうして, 遠野の人々は妖怪や動物とともに暮らしていたのである。「黄昏に女や子供の家の外にある者がよく神隠しにあふことは他の国々と同じ」とあり, 寒戸の婆の話(8話)が語られる。63話はマヨイガ(山奥の不思議な家)の話。——『遠野物語』は, 北上の小盆地における119の不思議な話を「目の前の出来事」として, つまり「現在の事実」として読者に提示するのである。

## 7. 『遠野物語』の評価とその影響

『遠野物語』の評価とその影響については, 遠野市立博物館(2010)がつぎのように要約している。まず, 初版については4人の評があり, それぞれの印象を語っている。

- ・泉 鏡花(1873~1939) — 近来の快心事類少なき奇観なり…。(「遠野の奇聞」)
- ・島崎藤村(1872~1943) — 『遠野物語』の著者を…観察の豊富な旅人として見たい。
- ・田山花袋(1872~1930) — 粗野を気取った贅沢, さう言った風が至る処にある。
- ・水野葉舟(1883~1924) — この零細な断片を集められた中に, 実に深い智識の基礎が行き渡って居るのを感じるのである。

なお, 増補版(1935)の刊行に際しては, 金田一京助と折口信夫のことは添えられている。言語学者の金田一京助(1882~1971)曰く, 『遠野物語』は「郷土研究—祖国文化の再認識—日本民俗学の, 今を去る四半世紀前, 始めて呱呱の声を挙げた最も記念すべき最初の文献である。」と高く評価している。そして, 弟子の民俗学者・折口信夫(1887~1953)は柳田國男の還暦



とその記念出版を慶賀して、「先生一代の中に、花咲く春が来て赤い頭巾を著て、扇ひろげて立って居られる先生の姿を見る時が、ここに廻り合わせきたのである。」（増補版、後記より）と述べている。

他方、仏文学者の桑原武夫（1904～1988）は「『遠野物語』は先ず何よりも、一個の文学書である。」（「遠野物語から」）と断言している。

1960年以降になると、『遠野物語』に基づく論考が次々に発表され、研究が進んでいく。

- ・加藤秀俊・米山俊直（1963）『北上の文化一新・遠野物語』，社会思想社
  - ・吉本隆明（1968）『共同幻想論』，河出書房
  - ・三島由紀夫（1970）「わたしはこれを長年文学として読んできた」－読売新聞 6月12日
  - ・ロナルド・モース（1977）『近代化への挑戦－柳田国男の遺産』，日本放送出版協会
  - ・山田野理夫（1977）『柳田国男の光と影－佐々木喜善』，農村漁村文化協会
  - ・岩本由輝（1983）『もう一つの遠野物語』，刀水書房
  - ・三浦佑之（1987）『村落伝承論－『遠野物語』から』，五柳書院
  - ・野村純一（1992）『遠野物語小事典』，ぎょうせい
  - ・後藤総一郎監修，遠野常民大学（1997）『注釈 遠野物語』，筑摩書房
  - ・石井正己（2000）『遠野物語の誕生』，若草書房
  - ・石井正己（2002）『遠野の民話と語り部』，三弥井書店
  - ・吉川祐子（2002）『遠野昔話の民俗誌的研究』，岩田書院
  - ・東 雅夫（2010）『遠野物語と怪談の時代』，角川学芸出版
- などなどである。

## 8. 柳田國男の遠野紀行

序文第2節は、柳田國男の遠野紀行であり、読者を明治末期の遠野郷に誘うのである。

## ＜序文第2節＞

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十余里の路上には町場三ヶ所あり。其他は唯青き山と原野なり。人煙の希少なること北海道石狩の平野よりも甚だし。或は新道なるが故に民居の来り就ける者少なきか。遠野の城下は即ち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。其馬は黔き海草を以て作りたる厚綵を掛けたり。虻多き為なり。猿ヶ石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸国其比を知らず。高所より展望すれば早稲正に熟し晩稲は花盛にて水は悉く落ちて川に在り。稲の色合は種類によりて様々なり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色の同じきは即ち一家に属する田にして所謂名処の同じきなるべし。小字より更に小さき区域の地名は持主に非ざれば知らず。古き売買譲渡の証文には常に見ゆる所なり。附馬牛の谷へ越ゆれば早池峰の山<sup>4)</sup>は淡く霞み山の形は菅笠の如く又片仮名のへの字に似たり。此谷は稲熟ること更に遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始は小さき雉かと思ひしが溝の草に隠れて見えざれば乃ち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊あり。茲にのみは軽く塵たちは紅き物聊かひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊<sup>5)</sup>と云うは鹿の舞なり。鹿の角を附けたる面を被り童子五六人剣を抜きて之と共に舞ふなり。笛の拍子高く歌は低くして側にあれども聞き難し。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑ひ兒は走れども猶旅愁を奈何ともする能わざりき。盂蘭盆に新しき仏ある家は紅白の旗を高く掲げて魂を招く風あり。峠の馬上に於て東西を指点するに此旗十数所あり村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入り込みたる旅人と又かの悠々たる霊山とを黄昏は徐に來たりて包容し尽く

4) 早池峰の山—早池峰山、標高1914メートルの北上山地の主峰。山岳信仰の山。

5) 獅子踊—祭りであると同時に童子たちによる鹿の舞いである。119話参照。

したり。遠野郷には八ヶ所の観音堂あり。一木を以て作りしなり。比日報賽の徒多く岡の上に灯火見え伏鉦の音聞えたり。道ちがへの叢の中には雨風祭<sup>6)</sup>の藁人形あり。恰もくたびれたる人の如く仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

(『柳田國男全集』第2巻, pf.9)

柳田國男は、『遠野物語』の原風景を知るべく、1909年(明治42年)8月に遠野を初めて訪れた。そこで、台湾人類学者・井能嘉矩(1867~1925)に教えを乞うている。この旅の様子は上記の序文にある通り、文語調で詩情豊かに表現している。以下に展開する119話の舞台(地形・集落と年中行事・民間信仰)を描いているのである。詳細は高柳俊郎(2003)を参照。

## 9. 遠野市における『遠野物語』の見直しと観光振興

遠野において『遠野物語』が見直されるようになったのはここ40年のことである。

- ・1970年(昭和45年) 遠野が岩手国民体育大会サッカー会場となり、『遠野物語』が見直される。
- ・1971年(昭和46年) 遠野駅前に「遠野物語碑」が建立された。
- ・1975年(昭和50年) 柳田國男生誕百周年を迎えた。
- ・1972年(昭和47年) 市民公演「遠野物語ファンタジー」が始まり、以来毎年行われる。
- ・1980年(昭和55年) 遠野市立図書館・博物館(民俗専門博物館)が開館した。
- ・1982年(昭和57年) 遠野で日本民俗学会年会が開かれ、佐々木喜善顕彰碑が建立される。その碑文には、つぎの文字が刻ま

6) 雨風祭-虫送りの行事と雨風鎮めの祈禱行事を合体したもの。109話参照。

れている。／印は改行を示す。

— <佐々木喜善顕彰碑> —

碑文 広い日本の中には／実際どんな珍しい宝玉が／どんなに多く土の中に／埋没されて居るか／其れを掘り起こさねば／ならぬと思ひます。  
佐々木喜善

- ・1984年（昭和59年） 土淵に「伝承園」が開園した。佐々木喜善記念館、御蚕紙堂（おしら堂）、国指定重要文化財の菊池家住宅（曲り家）などがある。
- ・1986年（昭和61年） とおの昔話村が開設された。土地の語り部が訪問客に民話を語る所である。
- ・1995年（平成7年） NPO法人 遠野物語研究所が設立される。
- ・1996年（平成8年） 遠野ふるさと村が開設された。そこには、移築した曲り家と柳田翁投宿の高善旅館がある。

以上のように、遠野市では1970年頃から『遠野物語』という文化遺産を核とした町おこし・観光地化が進んできたのである。いまや<遠野物語>は商品化され、これにあやかった菓子や土産物が売られている。つまり、フォークロアからフォークロリズムへである。

## 10. 遠野物語百周年の遠野

2010年（平成22年）に遠野物語百周年を迎え、遠野では様々な記念行事が行われた。

- ① 4月に遠野市立博物館がリニューアル・オープン。特別展「遠野物語の100年—その誕生と評価」（4月24日～8月30日）が開催され、特別展図録が刊行された。
- ② 6月12日と13日に岩手県遠野市で遠野物語百周年記念行事が開かれた。

- ③ 6月14日が、遠野物語刊行百周年の記念日であった。
- ④ 9月4日に遠野物語研究所主催・百周年記念「遠野物語ゼミナール2010」がエアリアで開かれた。石井正己、ジョセフ・クライナー、佐藤誠輔による講演、語り部3名による語りのあと交流会があり、遠野産の飲物と食物が参加者に振る舞われた。
- ⑤ 岩手大学シニアカレッジ（8月31日～9月6日）参加者一行は、9月4日に千葉家の曲り家と遠野市立博物館と遠野ふるさと村を見学し、その後遠野物語研究所主催「遠野物語ゼミナール2010」に出席した。翌日の9月5日には土淵町フィールドワークを行ない、山口の水車・山口孫左衛門家の井戸の跡・佐々木喜善の生家（車窓より）・ダンノハナと佐々木喜善の墓・デンドラノ（連台野）・伝承園・常堅寺の河童狍犬・カップ淵を見学した。このうち、サシキワラシが出ていって没落した山口孫左衛門家は、この家の二十数人が茸の毒に当って死んだとき、七歳の女の子一人が生き残ったという（18話）。ダンノハナには昔館のあった時代に囚人を斬った場所であるという伝承があり、今は集落の共同墓地になっている（112話）。デンドラノは、昔六十を超えた老人が村から追いやられてここで生活していた所である（111話）。昼食後には、花巻市大迫町神楽の館での早池峰神楽を鑑賞して盛岡に戻った。なお、遠野巡検に筆者は、石井（2000b）と三浦・赤坂（2010）を携行し、大いに役立ったことを書き添えておく。

## 11. まとめ

2010年（平成22年）6月14日に『遠野物語』は刊行百周年を迎えた。『遠野物語』は、東京の柳田邸で佐々木喜善が語った遠野の民話を柳田國男が「感じたまま」書き、文語調で一編の文芸作品に仕上げたものである。だが、その語り手である佐々木喜善（の生い立ちと業績）や彼を柳田國男に紹介した水野葉舟という作家の存在については等閑視されてきた。当然ではあるが、かれらなしにはこの物語は成立しなかったことを知るべきであろう。

喜善はのちに「日本のグリム」と称される昔話研究者になり、葉舟は喜善から聞いた「もう一つの遠野物語」というべき怪談集を発表していたのである。

『遠野物語』は1910年（明治43年）以来、今日までさまざまな評価があり、近代文学・口承文芸論・民俗学・思想史などへの影響は計りしれない。『共同幻想論』、『近代化への挑戦』、『村落伝承論』などの淵源に『遠野物語』あり、である。

遠野は、いまなお「日本民俗学」発祥の地として、旅人を引きつけている。だが、百年前の伝承世界がそのまま息づいているわけではなく、21世紀の生活文化が営まれる中でこの物語が<町おこし>のために使われているのである。にもかかわらず、遠野は一度は探訪すべき小盆地であり、今後も土地の民話と民俗を自分の目と耳で確かめたいとする旅人と研究者を誘い続けるであろう。

#### 参考文献

- ・石井正己（2000a）『遠野物語の誕生』，若草書房
- ・石井正己（2000b）『図説 遠野物語の世界』，河出書房新社
- ・石井正己（2010）『「遠野物語」を読み解く』，平凡社
- ・岩本由輝（1983）『もう一つの遠野物語』，刀水書房
- ・後藤総一郎ほか（1992）『柳田國男と遠野物語』，遠野市立博物館
- ・高柳俊郎（2003）『柳田國男の遠野紀行』，三弥井書店
- ・遠野市立博物館（2004）『日本のグリム－佐々木喜善』，遠野市立博物館
- ・遠野市立博物館（2010）『遠野物語の100年－その誕生と評価』，遠野市立博物館
- ・三浦佑之・赤坂憲雄（2010）『遠野物語へようこそ』，筑摩書房
- ・柳田國男（1910）『遠野物語』，自刊
- ・柳田國男（1935）『遠野物語 増補版』，郷土研究社
- ・柳田國男（1997）『柳田國男全集 2 遠野物語，時代ト農政，山島民譚集』，筑摩書房
- ・横山茂雄編（2001）『水野葉舟 遠野物語の周辺』，国書刊行会
- ・Morse, Ronald A. (1975) *The Legends of Tono*, The Japan Foundation.